2024.4.20 八千代市郷土歴史研究会 4 月例会　　蕨 由美

千葉県北西部の日蓮宗系庚申塔

八千代市郷土歴史研究会では、一昨年からの市内北西部の佐山・真木野に続き、今年度は小池地区の調査を行っていますが、24 基の庚申塔が並ぶ小池の庚申塔群は、貴重な史跡・歴史民俗遺産です。

特に重要な点は、①元禄 5 年（1692）から現代（2019 年）まで 327 年間、連綿と途切れることなく続けて 24 基建立されていること、②優れた像容の青面金剛像塔が 3 基あること、③日蓮宗系庚申塔であること、④当群最古の元禄 5 年塔は千葉県内の日蓮宗系庚申塔の中でも青面金剛像塔として初発であること、などです。

この小池の庚申塔群の宗教的・歴史的・地理的な価値を把握、理解するため、千葉県内の庚申塔、特に日蓮宗系庚申塔に関する論説とデータを調べ、さらに船橋市など市外に範囲を広げて、実地調査を試みています。

今回の学習会では、佐山・真木野・小池などの庚申塔群の背景を知る一助になればと思い、中間報告をさせていただきます。

【要旨】

千葉県北西部における近世庚申塔は、千葉・埼玉・東京が境を接する江戸川流域の発祥地に近い松戸・市川市域で成立し、東へと広がっていったと推定できる。

この地域は中世以来の有力な日蓮宗の古刹も多く、これらの寺院の影響下の村落から、題目（「南無妙法蓮華経」・「妙法」）銘や「帝釈天」銘の庚申塔が普及して、旧中山法華経寺領の船橋市・八千代市域に及び、近現代まで、数多くの日蓮宗系庚申塔が造立されていった。

その数は、八千代市の日蓮宗地域で 118 基、うち 64 基が日蓮宗系庚申塔である。船橋市の同地域では 72 基、うち 61 基が日蓮宗系庚申塔である。

これらの地域の初期日蓮宗系庚申塔の形態は、明暦～天和（1656-83）期は、釈迦如来像に「妙法」などの題目を刻んだ笠付型、題目または「帝釈天（釋提桓因天）」銘三猿付板碑型・笠付型が主流であった。（一般の庚申塔も、諸如来・菩薩像塔、または三猿付板碑型などである）

当地域で一般の庚申塔に青面金剛像が現れるのは、延宝（1673～）期からである。日蓮宗系庚申塔はやや遅れて、八千代市小池の元禄 5 年（1692）から盛んに建立され、船橋市藤原町の安永 7 年（1778）まで続く。

天明（1781～）期から、一般の青面金剛像塔が一斉に「青面金剛」銘、さらに「庚申（塔）」銘の文字塔へと変わっていき、日蓮宗系庚申塔も機を同じくして、「帝釈天（釋提桓因天）」、まれに「庚申（塔）」銘の文字塔に変わる。

安永 7 年の庚申の日に、柴又の題経寺で「帝釈天」板本尊が発見され「帝釈天」ブームが興るが、像塔から文字塔へ変わっていく時代背景から、その題経寺式「帝釈天」像を刻んだ庚申塔は松戸市紙敷の嘉永 5 年（1852）塔のみである。なお、題経寺式以前の帝釈天像塔は、船橋市前貝塚町の元禄 6 年塔がある。

江戸後期以降も船橋・八千代市域では庚申塔の造立が続けられ、現代に及ぶ。